

## 瀬戸内海 アートな旅(2/2)

### 大塚陶板国際美術館と鳴門の渦潮

4/23/2017

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

高松市内で讃岐うどんを食したあとは、一路高速バスで徳島県鳴門へ。腹が満たされ、また栗林公園で歩いたことで疲れが出たのか、車内で昼寝。1時間ほどで高速鳴門北ICバス停に到着。それから、タクシーに乗り継いで、本日のもうひとつの目玉「鳴門のうずしお」鑑賞です。最終の16:30発の小型高速船に乗ることができましたが、小潮ということもあり、一般的な写真で見る荒々しいうずしおは期待できないということでした。小型高速船で大鳴門橋の真下に行き、船長の舵次第でうずしおの発生しそうなところを行き来してくれました。幸いにも、小さなうずしおをいくつも見ることができました。このうずしおの発生原因は、太平洋と瀬戸内海の際にある海底断崖(ちょうど、大鳴門大橋の下)と、太平洋と播磨灘との海流の速さと遅さにあるということでした。

写真のように、大鳴門橋とうずしおの海面のコントラストは絶妙でした。

ホテルは、大鳴門橋を間近かに見られるところでしたので、客室や風呂場からいつでも「大鳴門橋」と「うずしお」を楽しむことができました。翌日の朝食前に、大鳴門橋にある全長450mの海上遊歩道を楽しんできましたが、海面からの高さは何と45mもあり、足がすくむ思いでした。船から見るのと違って、定点で海一面を見られるのもよいものでした。



高速小型船から見るうずしおと大鳴門橋



宿泊した部屋から見た朝日と大鳴門橋

3日目は、大鳴門橋の鳴門側にある「大塚国際美術館」での絵画(陶板)鑑賞です。この美術館はポカリスエットやカロリーメイト、ソイジョイなどの飲食品のほか、病院で使用される輸液等の製造販売会社大塚製薬グループの75周年を記念して建築されたものです。総工費は絵画の著作権も含めると数百億円はするものらしいです。美術館の真向いには、大塚製薬の保養所(迎賓館)潮騒荘があり、この建物は、緑色の屋根と赤い手すりの配色でまさに龍宮城のようでした。保養所なのでグループ社員や大塚グループのお客様が過ごすのでしょう。一度は入館したいものです。

さて、大塚国際美術館は、国際と名前がつくように西洋の有名な絵画を「陶板」に焼き付けたものを展示してあるのです。有名な「落穂拾い」や「ヒマワリ」など、古代から中世、ルネサンス、バロック、近代のものまで約1,000点を展示してあります。鑑賞料金は3,240円と高いのですが、世界の名画

を実物大で見られ、かつガイドの説明があるとなると高いとは感じませんでした。今回は、定時に開催されています、2時間ガイドの人の説明を聞きながら、全行程の約半分を回ることができました。その中の重要な作品20点程の詳しい説明を聞くことができました。館内をじっくり見るには一日がかりといった感じです。このように名画の見どころや作者の経歴、時代背景等を説明していただいたことで、絵の見方が変わり大変興味深いものでした。最近、他の美術館でも展示物の見どころを説明したのがありますが、肉声で聞け、しかもガイドの人柄が出て、お客様と一体となった喋り方なども楽しいものでした。やはり私設美術館という高い指向性がこのような行為をさせているのではないかと思った次第です。私流に言えば、NHKの「日曜美術館」のようなものです。

代表的な作品のうち、フェルメールの「真珠の首飾りの少女」のターバンの顔料は、ラピスラズリーのブルーと言って、「Gold」と同じ高価な値段がするらしいのです。そんな話もガイドから聞きました。また、世界の三大名画の話も出ました。三大名画のひとつは、ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」、二つ目はレンブラントの「夜警」、三つ目は、ベラスケスの「ラス・メニーナス(女官たち)」とのことでした。モナ・リザの陶板絵画の前では、ガイドの説明は次のようなものでした。「この絵画は人物が美しいということもあるが、特徴は輪郭線を描かないようにしたぼかしで書いたものであり、また遠くの景色をかすみにかける遠近感を出す空気遠近法を利用している」というのです。ふつうのように絵画を見ていいては知らないで終わっている絵画の見方を初めてしました。

他にも、「受胎の告知」というテーマを題材とした絵画の特徴は、三点セットと言って、ゆり・ハト・読みかけの聖書が必ず絵に入っているとのことでした。また、絵画の中でイエス・キリストを見つけようと思ったら、その背景に十字架が描かれているとのことでした。本当に絵画の見どころを押さえた説明なのです。

楽しい鑑賞ののち、一路高速バスで神戸三宮に向かい、横浜に帰ってきました。



システーナ・ホール

陶板は、2000年にわたり永久展示できるというものらしいです。

陶板は、原画の分解から始まり、陶板に転写し、焼いたものなのです。製作工程もさることながら、原画の著作権の交渉から購入するだけでも大変な資金と人力を要したことでしょう。

ハガキ大の陶板が額付で、3千円程で販売されていたので購入して家に飾りました。

左の写真にあります、ホールは絵だけではなく、教会そのものの空間までも再現されているのです。そして何百枚にも及ぶ陶板で構成されています。

実は、陶板の作成会社も大塚グループなのです。

以上